

イタリアの労資関係と諸政党について の覚書（1）

—イタリア共産党の党内論争1921～1930—

河 野 穰

イタリアの労働組合は伝統的に政党との結びつきがつよく、労資関係を把握するには諸政党の動向を把握しておくことが必要である。この覚書はそのための一連の検討の資料となるものである。

ある政党の歴史を把握しようとするとき、①特定の路線が選択される過程での党内における路線をめぐる闘争、②党が選択した路線、③その政党の組織力と現実の政治状況のなかではたした役割、④国際運動との関係等の諸側面からの把握が必要であり、しかもこれらの諸側面は密接にむすびついていて、それぞれ個別にとりあつかうことは不可能だが、ここではそのことを十分念頭においたうえで、まず①についてかんたんな経過をおってみることにする。

I

イタリア共産党 (Partito Comunista d'Italia) は1921年1月リヴォルノで開催されていたイタリア社会党 (Partito Socialista Italiano) 第 XVII 回大会で、共産主義派が分離、これを結成したものであるが、後者から前者が分離する過程で社会党内のグループがコミンテルンとのあいだにいかなる関係を展開していたかを考察することからはじめよう。共産主義派が分離する前の社会党の潮流が、改良派、最大限綱領派 (massimalista)、ボルディガ派、オルディネ・ヌオーヴォ派

イタリアの労資関係と諸政党についての覚書(1)

に大別されるのは周知のことであるが、コミンテルンとの関係でさしあたり焦点になるのは改良派である。

改良派はとくにイタリアの労働組合組織にねづよい基盤をもっていた。CGL(労働総同盟)をはじめとして、産業別組合、カーメラ・デル・ラヴォーロの多くは改良派の主導下にあったが、これは、19世紀後半、とくに北部イタリアにおいて積みかさねられてきた労使の交渉制度の一定の蓄積を反映するものである。社会党内でも改良派が多数をしめていたが、第Ⅰ次大戦を前にしてこの派が左右にわかれ、リビア併合に賛成するビッソラーティ(Bissolati)・ボノーミ(Bonomi)、A.カプリーニ(Cabrini)を除名したことにより党内の力が低下する。たとえば第Ⅰ次大戦末期1918年9月の第XV回大会の決議案では最大限綱領派の14,015にたいして改良派はわずか2,505しかかくとくしていないし(非妥協派とよばれる左派が2,507)、また1919年10月の第XVI回大会では独自の決議案をださず、最大限綱領統一派に歩調をあわせている。最大限綱領選挙派、最大限綱領統一派、共産主義棄権派の決議はそれぞれ48,411、14,880、3,417をえている⁽¹⁾。社会党における改良派の比重の低下はロシア革命の成功を中心とする第Ⅰ次大戦後の国際・国内情勢の変化をも敏感に反映したものでもあって、この改良派が戦後の状況の激変下で、第Ⅲインタナショナルに加盟することに賛成をした時期もある。1919年3月の社会党指導部(*la direzione del Partito*)が、第Ⅲインタナショナルを離脱し、3月2～6日モスクワで設立された第Ⅲインタに加盟することを「決定したさいには、賛成10にたいして反対3があったものの、同年10月ボローニヤで開催された同党第XVI回大会ではセルラーティ(Serrati)が提出した決議を満場

「第Ⅲインタナショナルに加盟することに、さまざまなフラクションの意見が一致したので、私はこの問題について——もし反対がなければ——拍手で投票するよう提案する⁽²⁾」一致で可決しており、また1920年7～8月の第Ⅲインタナショナル第Ⅱ回大会への派遣には、CGLのドラゴーナ(D'Aragona)もくわわっており、大会とならんでひらかれた《赤色労働組合インタナショナル》の準備会議で革命の意志を表明している。しかしこうした改良派のうごきは、この時期のヨーロッパの状況の

イタリアの労資関係と諸政党についての覚書(1)

激変を反映する挿話にすぎないのであって、この派の基本的特質はあくまで「国家の民主主義的改革……民主主義の確立に役だるためにプロレタリアートの勢力を鼓舞し組織しようという意図⁽³⁾」、漸次的改良にある。第Ⅲインタナショナルへの加盟を満場一致で確認した社会党第 XVI 回大会で、この派の領袖トゥラーティ (Turati) はロシア革命についてつぎように発言している。

「われわれは革命からプロレタリア階級そのものを遠ざけている。なぜならば、諸君が信じてもないし、おしゃべりする以外になにも努力していない暴力の奇蹟というメシア的期待のなかにプロレタリア階級をとどめておくことによって、諸君は、唯一の革命であるところの漸次的獲得という倦まずに努めねばならない・つらい仕事に興味を失なわせているからだ⁽⁴⁾」

イタリア社会党の党内情勢について、レーニンらは当初ほとんど知識をもっていなかった。1919年10月10日付「イタリア、フランス、ドイツの共産主義者へのあいさつ」のなかで

「イタリアの党については、われわれは、同党の大会（第 XVI 回ボローニャ大会のこと——引用者）が圧倒的多数で第三インタナショナル加盟とプロレタリアート独裁の綱領とを可決したということを知っただけである。だから、イタリア社会党は、残念なことにまだ古い党名をのこしてはいるが、実際には共産主義に合流したのである。イタリアの労働者と彼らの党に熱烈なあいさつをおくる！⁽⁵⁾」

とふれているだけであるし、またこのレーニンの書簡の3週間ほど前にボローニャ大会におくられたコミンテルン執行委員会の書簡も、結束にあたっての任務を

「プロレタリア独裁、その独裁の形態たるソヴィエト、ブルジョア独裁の道具であるブルジョア民主主義議会の廃止、赤軍の建設——これこそ、国際革命的プロレタリアートを結束する任務なのである⁽⁶⁾」

と明らかにしているにすぎない。しかし、翌年の5月ごろ、つまり、ダラゴーナがコミンテルン第2回大会へむけてイタリアを出発したころから改良派への批判と、これの排除をつよく要求するようになる。レーニンは1920年4月～5月に執筆した「共産主義内の『左翼主義』小児病」のながで、トゥラーティとのインタ

イタリアの労資関係と諸政党についての覚書(1)

ビューをまとめたマンチェスター・ガーディアンの記事に関連して、改良派をつぎのように非難している。

「……トゥラティ、トレーヴェス、モディリアーニ、ドゥッゴーニー派の諸君の思想と政治活動は……徹頭徹尾社会主義の裏切りである。賃金奴隷の状態のもとにあって、資本家を儲けさせるために働いている労働者のあいだで、秩序と規律を擁護するとは、いったいなんということであろう！……自然に拡大していくストライキの革命的な役割を理解しないとは、なんというろまな、ブルジョア的な平凡さであろう！⁽⁷⁾」

そして1920年7月～8月のコミンテルン第Ⅱ回大会で承認された21カ条項の加入条件は改良派の排除をつぎのように規定している。

「7、共産主義インターナショナルに加盟を望む諸党は、改良主義と『中間派』の政策と完全かつ絶対的に手を切ることの必要を認め、そしてこのような絶縁をできるかぎり広くその党员の間に弁護する義務を有する。これなしに首尾一貫した共産党の政策はありえない。

共産主義インターナショナルは、こうした絶縁ができるだけ速やかに実現することを無条件かつ絶対的に要求する。共産主義インターナショナルは、あの悪名高い日和見主義者、チュラチ（トゥラーティのこゝろ引用者）、モディリアーニ、カウツキー、ヒルファーディング、ヒルキット、ロンゲー、マクドナルド等が共産主義インターナショナルのメンバーのように見える権利をもつ、ということに同意できない。それは共産主義インターナショナルが、多くの点で、すでに分解してしまった第二インターナショナルになることにしかならない。

21、共産主義インターナショナルの提案した条件とテーゼを原則として拒否する党员は当該党より除名されねばならない⁽⁸⁾」

とし、さらに大会後、コミンテルン執行委員会がイタリア社会党におくった書簡はいっそうつよい調子でこのことをうったえている⁽⁹⁾。

改良派を排除するよゝうにというコミンテルンの要求にたいしてボルディガとセルラーディはまったく反対の態度をとった。

ボルディガは自己の支持者をナポリの友人から鉄道・郵便労働者、さらにトリノ、ミラノなど全国へ拡大してきたが、当初は「非妥協革命派」(intransigente)に属していた。ボルディガがセルラーディ派との政治的合意をつづけるか、それ

とも選挙棄権主義と共産主義要素の分裂を旗印としたフラクシオンを独立させるか、のあいだを揺れていた⁽¹⁰⁾のは1919年夏のことだといわれるが、ボルディガはフラクシオンの独立にふみきり、8月24日の「ソヴェト⁽¹¹⁾」に「共産主義フラクシオンの諸原則の全般的宣言」を発表した。同宣言が、イタリア共産党という名称の採用、社会民主主義者の除名、棄権という目標を明確にして選挙集会に関与することなどを要求しているように、社会民主主義者の除名、それによる純粋に共産主義者の党を建設することがボルディガの一貫した主張である。ボルディガは1919年11月10日、直接モスクワに書簡をおくり、社会党から分離して純粋に共産主義者の党を建設したい意図を明らかにして自己のフラクシオンへの支持を期待した。

セルラーティはこれと対照的な態度をとった。最大限綱領派の指導者セルラーティは1914年B・ムッソリーニのあとをついでアヴァンティ! の編集長になってから頭角をあらわし、すでに戦時中から国内・国外においてもっとも著名かつ人気のある指導者となっていた。セルラーティは参戦にエネルギーに反対して1918年には前年のトリノの暴動の責任を問われて投獄されたが、1918年9月のXV回で最大限綱領派は圧倒的な主導権を確立している。国際的な活動の面では、ツインメルブルド会議のマニフェストをイタリア国内で刊行することに成功し、またキーンタール会議でも、第IIインターを放棄して第IIIインターを設立するというレーニンの提案を、イタリア代表のうちでただ1人支持している。そして1919年10月の社会党XVI回大会では第IIIインター加盟の決議を満場一致で決議させ、10月1日、隔月刊誌「共産主義」を発行、自らその指導にあたった。だが、コミンテルンが加入の条件として要求した改良派の除名をそのまま受け入れることに、セルラーティは断固として反対した。セルラーティの主張はまず第1に第I次大戦中にイタリアの改良派のとった行動が他の国の改良派とは異なっていたこと、第2にトゥラーティはつねに約束をまもってきたし、また党の規律を尊重してきたこと、第3にそのきざしがみえる反動の波が高まってくるとすれば、社会党の分裂や一部の除名が大衆を遠ざけるような形でおこなわれることは

イタリアの労資関係と諸政党についての覚書(1)

適当でないこと、第4に、したがってイタリアの改良派の処置については大衆をひきはなさないように時期、条件（除名という方法ではなく、離党という方法による分離もふくめて）をイタリアの党で自由に討議し、ここで自主的にきめるべきことを要求した。コミンテルン第Ⅱ回大会における「彼の演説は情熱的であるとともに高貴⁽¹²⁾」でもあった。

セルラーティの判断のさらに奥には「……大会のすべての決定は……すべての国において同時に“新しい”事態を作り出すことが可能であるという幻想に基づいている。⁽¹³⁾」という批判があり、それは各国の独自性についてのセルラーティのふかいリアリズムを示すものであったといえる。

改良派の除名問題にかぎらずセルラーティはコミンテルンの数多くの見解と対立した。

「レーニンとセルラーティの対立は、大会が進行するにつれ明白に、またますます顕著なものとなっていった。セルラーティはポリシェヴィキのテーゼや見解に頻繁に反対した。その反対ぶりは大会に参加したすべての外国の指導者のなかでモスクワにもっとも抵抗したという栄誉を獲得してもいいほどのものだった。⁽¹⁴⁾」

G・フィオーリのグ「ラムシの生涯」は、グラムシの立場を、セルラーティとはもとより、ボルディガとも異なるものとしている。グラムシは共産党の結成が少数派としてではなく、多数派として、「社会党と労働総同盟の権力を獲得」するかたちでおこなわれるようにと考えていたという。それはボルディガの分離にたいして内部からの革新の試みである。そしてグラムシのボルディガとの方向の相違の基礎には彼の党観がある。つまりボルディガにとって党は「少数の非妥協的な人びとのセクト」であり、「大衆はのちに、革命的行動のなかで、そのセクトに追従する」ものであるのにたいしてグラムシにとって、『フランシス・ジャコバン派の英雄的模倣のために大衆を利用する党であってはならず、党は大衆のものでなければならないのである⁽¹⁵⁾。

ただし、グラムシがこの方向をどれだけ積極的に主張し、また組織しようとしたかは疑問である。グラムシは、1920年4月のトリノの工場評議会運動をめぐる

争議が数歩退却をするように中断されたあとの5月8日、フィレンツェの棄権派の集会へ参加するなど、ボルディガに接近し（集会では棄権主義的先入観をすてるように説いてはいるが）、逆に社会党トリノ支部で最大限綱領派に接近したトリアッティやテルラチーニと疎遠になっており、さらにリヴォルノ大会を間近にひかえた20年11月のイーモラにおける共産主義派の集会でも、ボルディガの提議した動議の満場一致の賛成にくわわっている。したがって全体として「イタリア共産党の創立にたいて、グラムシがひじょう消極的だったことは、うたがいの余地がない。1921年のリヴォルノでの大会、すなわち社会党第17回大会とそれにつづくイタリア共産党創立大会とを通じて、グラムシは完全に沈黙をまもり、1度も発言していない⁽¹⁶⁾。」

1921年1月、58,783票をかくとくした共産主義派は、98,028票の最大限綱領派、14,695票の改良派とわかれてイタリア共産党を結成した。「イタリア共産党の結成が外国の命令（《モスクワ》）の命令にしたがった」ものではなく、イタリアの「経済、政治生活全体にわたって劇的にあらわれた深刻きわまる危機のなかにもとめなければならない⁽¹⁷⁾」ことは当然としても、あの時点で、分裂・結党をえらばしめた責任の一端をレーニンももっているとみなすことができよう⁽¹⁸⁾。リヴォルノの分裂・結党は、「……だれでもみとめているように、事態がいまや国家権力の獲得をめぐるプロレタリアートとブルジョアジーとの決戦にむかってすみつつある……ような情勢のもとでは、メンシェヴィキ、改良主義者、トゥラッティ派を党から遠ざけることは無条件に必要であるばかりでなく、すぐれた共産主義者であっても、動揺しかねないような、改良主義者との『統一』の方向への動揺をしめすような連中を遠ざけること、あらゆる責任ある部署から遠ざけることは、むしろ有益でさえありうる⁽¹⁹⁾」との判断を基礎としているが、1920年の末にこのような判断にもとづいて分裂をおこなわせたレーニンは、Ⅱで考察するように、半年たらずのうちに情勢認識と戦術について転換をおこなう。この両時点間には、ドイツの3月行動の失敗があり、またリヴォルノの様相自体も西ヨーロッパの状況認識に転換をあたえた要因であったとしても、コミンテルンの情勢

イタリアの労資関係と諸政党についての覚書(1)

認識と戦術がリヴォルノの分裂直後に転換し、イタリア共産党がこの分裂の基礎になった認識と戦術からはなれることを強制されたことも間違いのない事実である。イタリア共産党は新しい情勢認識と戦術に反対をつづけ、諸勢力と協力してファシズムとの効果的な闘いを展開することができず、苛酷な抑圧により国内の活動の息の根をほぼとめられているなかでさえも統一闘争を何年にもわたって遅らせることになる⁽²⁰⁾。

グラムシは後に分裂がもっとはやくおこなわれるべきであったと考え、リヴォルノの分裂を「敗北」とみなしている。つまり「共産党が創立されてからも、グラムシの現状認識はさらに悲観的になった。分裂が必然であり、共産党の創設が必要であったとしても、その時期をあやまったのではないか、もう1年早く分裂を決行すべきではなかったか、とかれはうたがい⁽²¹⁾」、そして「インタナショナルの権威の威信は絶大なものであり、われわれはそれを信じていた。そしてその権威と威信は、われわれの側に味方していた。それにもかかわらず政治的に組織されたプロレタリアートの多数派は、われわれの立場を間違ったものと判定し、われわれと行動をともにしなかった。だからわれわれは敗北したのだ⁽²²⁾」

II

イタリア共産党が結成されるまでの社会党内に存在していた諸潮流のコミンテルンをめぐる関係は以上のおりだが、1921年1月に結成された共産党の指導部は表のような構成となっている。つまり、中央委員会はボルディガ派8、最大限綱領派5、オルディネ・ヌオーヴォ派2という構成、執行委員会はボルディガ派4、オルディネ・ヌオーヴォ派1である。ボルディガの思考の特徴は極端な経済決定主義と、運動における形式上の純粋性維持を中心とする。このことは共産党の形成についての方針にもあらわれていたが、政治方針にあらわれたのが選挙の棄権主義であって、ボルディガはブルジョア議会への参加を党の純粋性、社会主義運動の純粋性をそこねるものとして拒否する。だがこの棄権主義はイタリア共産党結成の前からレーニンによりきびしく批判されていた。

イタリアの労資関係と諸政党についての覚書(1)

表1 イタリア共産党指導部の構成

	1921.1 リヴォルノ大会 I	1922.3 ローマ大会 II	1922.5	1923.4
委執行 委員会 政治局 等	執行委員会 ボルディガ } フォルティキ } ボルデ アーリ } イガ グリエーコ } 派 レボッシ	執行委員会 (ボルディガ グリエーコ テラチーニ レボッシ フォルティキアーリ)	グラム シモス クワヘ	コミンテルン執行委員会 拡大総会、イタリア共産 党の執行委員会の辞任を 認め、これに替る執行委 員会を新設を新設 トリアッティ } スコッチマルロ } 多数派 フォルティキア } ーリ } タ ス カ } ヴ オ ー タ } 少数派
中央委 員会	ボルディガ } グリエーコ } パロディ } ボルデ セツシ } イガ派 タルシ } ポラーノ } レボッシ } フォルティキ } アーリ }	ベッローニ } ボンバッチ } に替っ ミジアーノ } て パロディ }		
	グラムシ } テラチーニ } オルデ ーニ } イネ・ ーニ } スオ ボンバッチ } ヴォ派 ジェンナーリ } ミジアーノ } 最大限 マラビーニ } 綱領派	トリアッティ } アッザーリオ } がはい フレッキア } る ガスペリーニ } ニューデイ }		
決議、 勢力等		多 数 派 31,089 グラツィア 4,151 デイ 棄 権 707		

イタリアの労資関係と諸政党についての覚書(1)

1-2 (つづき)

1923 12	1924コモ会議の勢力および同会議後のコミンテルンによる決定	1926.1 リヨン大会 Ⅲ	
グラム シウイ ーンヘ	<p>* コミンテルンの決定で上から トリアッティ、 グラムシ グラムシ派 スコッチマルロ</p> <p>補佐 { ジェンナーリ テルラチーニ</p> <p>メルス……タスカ派</p> <p>補佐 { タスカ ピボロッチェイ</p> <p>マッフィ……第Ⅲインター派</p> <p>補佐 { マラテスタ トネッティ</p>	<p>政治局</p> <p>グラムシ</p> <p>スコッチマルロ</p> <p>トリアッティ</p> <p>テルラチーニ</p> <p>カミッラ・ラヴェーラ</p> <p>ラヴァッツォーリ</p> <p>グリエーコ</p> <p>書記局</p> <p>スコッチマルロ</p> <p>カミッラ・ラヴェーラ</p> <p>トリアッティ</p> <p>テルラチーニ</p> <p>グリエーコ</p>	<p>組織局</p> <p>スコッチマルロ</p> <p>ラヴェーラ</p> <p>フレッキア</p> <p>テリエーニ</p> <p>書記長 グラムシ</p> <p>グラムシをはじめとして逮捕がまぬがれた執行委員は</p> <p>ラヴェーラ</p> <p>グリエーコ</p> <p>トリアッティ、ラ</p> <p>ヴァッツォーリの</p> <p>み、グラムシ逮捕</p> <p>後のトリアッティの地位は同輩中の第1人者、書記局作業の責任者</p>
	<p>コミンテルンの決定で 上から</p> <p>グラムシ派………9</p> <p>タスカ派………4</p> <p>第Ⅲインター派………4</p>	<p>グラムシ</p> <p>スコッチマルロ</p> <p>トリアッティ</p> <p>テルラチーニ</p> <p>タスカ</p> <p>グリエーコ</p> <p>C.ラヴェーラ</p> <p>ラヴァッツォーリ</p> <p>レオネッティ</p> <p>セルラーティ</p> <p>ジェンナーリ</p> <p>マッフィ</p> <p>フレッキア</p> <p>チェリアーナ</p>	<p>ニューデイ</p> <p>オベルティ</p> <p>ヴェネゴニ</p> <p>ボルディガ</p> <p>パニョラーティ</p> <p>アッレガート</p> <p>トリエステの労働者</p> <p>候補</p> <p>トレッソ</p> <p>ロヴェーダ</p> <p>テレーザレッキア</p> <p>アッザーリオ</p>
	<p>1924.5コモ会議の勢力</p> <p>ボルディガ派………41</p> <p>グラムシ派………8</p> <p>タスカ派………10</p> <p>棄権………2</p>	<p>グラムシ派</p> <p>ボルディガ派</p>	<p>90.8%</p> <p>9.2</p>

イタリアの労資関係と諸政党についての覚書(1)

1-3 (つづき)

コミンテルン第Ⅶ回大会 (1928.7~9) 後の指導部	1929.9 中央委	1930.3 中央委	1930.6 中央委
政治局 トリアッテイ グリエーコ シローネ ラヴェーラ ラヴァッツォーリ レオネッティ トレッソ タスカ 候補ロンゴ 共青代表セッキア 組織局 グリエーコ ラヴェーラ トリアッテイ シローネ セッキア	Tascaを除名し、 ロンゴが昇格 グリエーコはモスクワに派遣 書記局 トリアッテイ ラヴァッツォーリ トレッソ ロンゴ 共青代表セッキア	シローネ、ラヴァッツォーリ、レオネッティ トレッソ政治局解任 政治局 トリアッテイ ロンゴ グリエーコ ラヴェーラ 共青セッキア ボルディガを党より除名	トレッソ レオネッティ ラヴァッツォーリ 党から除名 のちにシローネ除名
トリアッテイ グリエーコ タスカ ラヴァッツォーリ トレッソ ラヴェーラ レオネッティ シローネ ロンゴ ジェンナーリ ニューデイ 候補 デイ・ヴィットリオ ドッザ セッキア テレーザ・レッキア ジェルマネット	サンティアーフ ラウジン ジガンテ 中央委にはいる	シローネ、ラヴァッツォーリ中央委解任 レオネッティ候補に格下げ テレーザ・レッキア候補解任 フラウジン ジェルマネット デイ・ヴィットリオ サンティアード ヅザア 中央委にはいる	

資料 Spriano, Storia del Partito comunista italiano よりまとめた。

イタリアの労資関係と諸政党についての覚書(1)

「同志ボルディガとその『左派』仲間は、トゥラティー派の諸君にたいする正しい批判から、議会に参加することは一般に害があるというまちがった結論を引きだしている。イタリアの『左派』は、この見解を擁護するために、これといった論拠は露ほどもあげることができない。彼らは、ブルジョア議회를ほんとに革命的・共産主義的に利用し、プロレタリア革命の準備にとって文句なしに有益なように利用する国際的な手本をまるで知らない。彼らは、『新しいもの』をまるきり思いうかべようとせず、議会活動の古い、非ポリシェヴィキ的な利用について、わめきたて、際限もなくそれを繰り返しているのである。
.....

このような『単純な』、『安易な』、いかにも革命的に見える方法で、労働運動内部のブルジョア民主主義的影響とたたかうというむずかしい任務を『解決』しようと考えながら、実際には、自分の影におびえて逃げだし、困難には目を閉じるだけであり、口さきだけで困難からのがれようとしているところにこそ、議会政治に参加することを『否定』する見戯がある。
.....

愛すべきボイコット主義者と反議会主義者よ、君たちは『おそろしく革命的』だと自任しているが、実際には君たちは、労働運動内のブルジョア的影響にたいする闘争の比較的小さな困難におじけてしまったのだ。⁽²³⁾」

これにたいして、オルディネ・ヌオーヴォ・グループを中心とするイタリア社会党トリノ支部が1920年5月8日オルディネ・ヌオーヴォに発表した文書が、共産主義インタナショナル第二回大会の基本任務についてのテーゼのなかでレーニンの積極的な評価を受けたのはよく知られていることである。

「イタリア社会党にかんしては、イタリア社会党トリノ支部の名で、同党全国評議会への提案として、雑誌『新秩序』（『オルディネ・ヌオーヴォ』）の1920年5月8日号に述べられたこの党にたいする批判と実践的提案とが、根本において正しいことを、第三インタナショナル第二回大会はみとめる。この批判とこれらの提案は、第三インタナショナルのすべての基本原則に完全に合致している。⁽²⁴⁾」

だがこれらのことも、結成された共産党におけるボルディガの地位を弱めはしなかったのである。「ボルディガは、新しい党の絶対支配者であった⁽²⁵⁾」。

Iの末尾でもかたんにふれたように、1921年6～7月のコミンテルン第三回大会から1922年初頭にかけてコミンテルンは方針を転換する。つまりレーニンは

イタリアの労資関係と諸政党についての覚書(1)

1917年いらい、ヨーロッパ革命がさし迫っていること、そしてロシア革命はこのヨーロッパ革命が成功することによってこそ生きながらえることができるのだ、という確信をもちつづけてきたのであるが、1920年末にいたってこの確信を変更せざるをえないことをみとめるようになる。

「三年前、われわれがロシアにおけるプロレタリア革命の任務と、その勝利の条件との問題を提起したとき、われわれは、もし西欧のプロレタリア革命によって支持されないなら、この勝利は安定したものとはなりえないこと、わが国の革命の正しい評価は国際的見地に立ってのみ可能であることを、いつもはっきり言ってきた。勝利を安定したものにするためには、われわれは、あらゆる資本主義国で、すくなくともいくつかの主要な資本主義国で、プロレタリア革命の勝利を獲得しなければならない。だが、三年間の苛烈でねばり強い戦争のあとで、われわれはいまや、われわれの予言がどういふ点ではずれ、どういふ点で的中したかを知っている。この問題の急速な、簡単な解決が得られなかったという点で、これらの予言はずれた。」⁽²⁶⁾

こうしたレーニンの認識が変化したのにもなつて1921年6～7月のコミンテルン第Ⅲ回大会のテーゼも基軸を移動させ、

「プロレタリアートの権力への公然たる革命闘争は現在多くの国で弱まり緩慢になりつつあることは否定できない」

とし、これに対応する戦術を

「現在の恐慌における共産党の主要任務はプロレタリアートの守勢的闘争を指導し、それを拡げ深めること、それらの闘争を相互に結びつけること、および事態の発展に応じてそれらを最後の目標のための決定的政治闘争へ転化することである⁽²⁷⁾」

とのべ、ラデックの報告も、ヨーロッパの共産党を前衛の集団とせず、世界プロレタリアートの大軍隊とするために勤労大衆をかくとくすることを合言葉とするようにうったえた。イタリア共産党は、ドイツ、ハンガリー、ポーランド、オーストリア、ブルガリアの党とともに提起された戦術に反対、テルラチーニは効果的な革命行動にとって多数のかくとくとは本質的な任務ではないと攻勢的闘争の理論を擁護した。これにたいして大会の席上レーニンはテルラチーニをはげしく批判⁽²⁸⁾している。イタリア共産党は多数の指導を獲得するために大衆のなか

イタリアの労資関係と諸政党についての覚書(1)

へという合言葉をうけいれたものの、その理解を一定の範囲に限定して、労働組合の行動にかぎるとしたのである。

「イタリア共産党は、プロレタリアートにたいし、日々に損害が尖鋭化している状況、そして経済的・社会的・政治的諸事実の総体において対処すべき状況からの唯一の出口が、勤労者階級のすべての産業、すべての地方機関の統一戦線を実現することによって導かれる全プロレタリアートの行動、であることを明らかにする⁽²⁹⁾」

ボルディガも同年10月、統一戦線が賃金の引き上げ、失業、ファシストの攻撃に対処するための労働組合の統一を意味し、プロレタリア政党間のブロックを意味しないと説明した⁽³⁰⁾。

だがコミンテルンの側は1921年末から22年初頭にかけて、転換の鮮明さをさらにつよめることになる。コミンテルン執行委員会は1921年12月18日の「労働者の統一戦線と第二、第二半およびアムステルダムの各インターナショナル所属の労働者ならびにアナルコ・サンディカリスト組織を支持する労働者に対する態度とに関して共産主義インターナショナル執行委員会が採択した指令」、および1922年1月1日には「統一戦線に関する共産主義インターナショナル執行委員会・赤色労働組合インターナショナルの宣言」のなかで統一戦線戦術をいっそう明確にうちだすのである。

「……現下の情勢は国際プロレタリアートの全勢力の集中を要求している——すなわち、プロレタリアートに支持される政党が、プロレタリアートの当面の緊急要求のために共同闘争を敢行する熱意をもっているかぎり、これらの諸党間の相違点は度外視して、諸党のすべてが統一戦線を結成することが、現下の情勢から要求されている……⁽³¹⁾」

各国共産党の不満、不同意の声はいぜんつよく、たとえばフランス共産党中央委員会は、統一戦線戦術がフランスには適用できないという決議を採択、また1922年2月24日から3月4日まで開催されたコミンテルン執行委員会第1回拡大総会で、フランス、イタリア、スペインの代表はなおも統一戦線テーゼに反対をづけている。従来の共産党の宣伝は、社会民主主義者を労働者階級の最悪の敵であると強調してきたのだから、新しい戦術は労働者を混乱させるといのがそ

イタリアの労資関係と諸政党についての覚書(1)

の根拠である。しかしテーゼは46：10で可決された。

各国共産党とおなじく規律に服することは承認しながら、1922年3月の第Ⅱ回ローマ大会において決定されたイタリア共産党の路線はこのコミンテルンの新しい方向に合致するものではなかった。同大会討議文書は1月に発表されたが、ボルディガとテルラチーニが署名した大会の中心となる戦術に関するテーゼは、党の集中性、統一、自発的性格を強調し、他の政党や他の政党をはなれた部分が共産党にくわわることはできないこと、戦術は、状況との関連だけで扱えられるのではなく、むしろその純粋な限界内ですでに具体化されているものであること、各国共産党の綱領と行動が他の政治的グループ化によって汚染することはありえないなどの点を主張している。このテーゼはボルディガとテルラチーニの、社会民主主義およびブルジョアジー左派ともっとも決然たる闘いが必要であるという従来の主張をいろいろ反映しており、これらの諸力によって表現されるその時々々の政府は反動的であること、その唯一の積極的役割は、プロレタリアートからあらゆる幻想をうばいとることだとしている⁽³²⁾。

こうした方向は、コミンテルンがうちだした統一戦線の路線と明らかに異なった路線であって、統一戦線についてはさきにものべたような労働組合に関するものとの理解をつづけた。

コミンテルンはこのテーゼを検討、その全構想を論駁、否認し、コミンテルン第Ⅲ回大会の議決議と完全に対立すると断言する書簡を送付してきたが、党の執行委員会はこれを公表せず、執行委員会とコミンテルン代表は、テーゼは審議用に提出されるのであって、コミンテルン第Ⅳ回大会以後に変更される、という妥協をむすんだ。しかしこの年1922年10月29日にイタリア共産党が発した宣言が、『いわゆる護憲民主制を保障する現政治体制をもってしようと、ファシスト独裁制をもってしようと、ともに』労働者は連帯性を示すことは不可能であると述べ……、この二つの敵に対抗して『プロレタリアートは自己の勢力を結集し、独立の政治関与者として行動すべきである。』『プロレタリアート民主主義者——すなわち連合派——とのブロックなるものは、雇用主の支配に反対する闘争におい

イタリアの労資関係と諸政党についての覚書(1)

てプロレタリアートを最終的に武装解除するものである』こと、つまり「他の諸階級との協力を提議する者はすべて、資本主義的搾取の代理人として排撃されねばならない⁽³³⁾」ことを強調しているのをみれば、まさにコミンテルン代表との妥協が、単なる形式にすぎなかったことが明瞭である。

ローマテーゼに批判的見解をもつのはボンパッチ、プレスッティ、グラツィアデイ、タスカらであった。

「イタリアの党内における（ローマ）テーゼへの反対は、まったく考えかたの異なるふたつの潮流が代表している、ひとつの潮流はプレスッティとボンパッチが代表する潮流で、純粋にインターナショナルのテーゼの領域に関心を集中し、ひとつひとつのテーゼをあまり深い洞察なしに擁護した。もうひとつの反対潮流はグラツィアデイとタスカ同志が代表するもので、戦術と（ローマ）テーゼの硬直性を批判し、イタリアの特殊な政治状況に関連した一定の留保をするにしても、イタリアにおいて政治の領域でも統一戦線を適用する可能性を承認した。」⁽³⁴⁾

この少数派の提出した決議は、多数派の31,089にたいして4,151をかくとくしているにすぎない。大会で選ばれた執行委員会はボルディガ、グリエーコ、テルラチーニ、レボッシ、フォルティキアーリで、それは「ボルディガ派と元オルディネ・ヌオーヴォ派のブロックの再現」⁽³⁵⁾であった。トリアッティはこのときはじめて中央委員会にはいり、グラムシはコミンテルンの執行委員会におけるイタリア代表としてモスクワに派遣され、少数派は指導機関に若干の代表をいれることになる。

結成されたばかりのイタリア共産党とコミンテルンのあいだの見解がくいちがったもうひとつの問題はイタリア社会党との合同問題である。

1922年10月の社会党 XIX 回大会は、ミンテルンに加入するというセルラーティらの動議を32,100票の多数で可決した。しかしこれに反対する票数も29,119とほぼ拮抗する数にたっている⁽³⁶⁾。社会党は1921年6～7月のコミンテルン第Ⅲ回大会へも代表を派遣したが、社会党 XIX 回大会直後の11～12月のコミンテルン第Ⅳ回でセルラーティらはこの組織に復帰し、コミンテルンの同大会は共産党と社会党との即時合同を決定する。

イタリアの労資関係と諸政党についての覚書(1)

イタリア共産党は合同の実行に同意はしたが、すでに考察したローマテーゼに表現されている汚染から党の純粋性をまもるという指向、またさきに言及した22年10月の宣言の内容からすれば、多数派は合同に反対であり、この同意が「規律」による受動的・形式的なものであることは明らかであった。したがって規律による同意をあたえたのちも共産党内の抵抗はつよく、ジノヴィエフは1923年6月の報告で「ボルディガの率いるイタリアの中央委員会が、いまだに敵はセラチ（セルラーティのこと—引用者）であってムッソリーニではないと信じている」⁽³⁷⁾とのべている。

社会党の側も1922年12月30～31日にコミンテルン第Ⅳ回大会の決議をうけいれることをきめ、共産党との合同をすすめるため党代表がモスクワにとどまって具体的な作業をおこなうように命令した。しかし社共代表の構成する合同準備委員会のモスクワ滞在が長びいているあいだに賛成・反対の勢力が逆転し、1923年4月のミラノ大会では多数が合同に反対をする。コミンテルンは、合同賛成者が社会党にとどまって力関係を再度逆転するように勧めたが、そのごセルラーティらは社会党を除名されてしまう。

共産党と社会党の合同はこのように遅々としてすまなかったが、1924年月の選挙では共産党と社会党合同主義者とのあいだに選挙協定がむすばれて19議席をかくとく、同年6月共産党と社会党第Ⅲインターナショナル派との合同が実行された。

Ⅲ

ボルディガを中心とした結成直後のイタリア共産党とコミンテルンとの対立は以上のとおりだが、結成されたばかりの党では統一への凝集力がつよく、またボルディガの権威と魅力、「一般的能力と仕事の能力としてはすくなくとも3人前の価値」があり、しかも「法外なまでに不屈で頑固」で「『力強い』人柄⁽³⁸⁾」によりテルラチーニなどはボルディガの立場にきわめて接近した。そしてタスカ、グラツィアデイらをのぞき、コミンテルンにたいしても結束して抵抗したのである。だがボルディガの政治指導のもつ極端な純粋指向性は、ファシズムの暴力と対決

イタリアの労資関係と諸政党についての覚書(1)

することがとりわけ緊急の課題となっているイタリアでは重要な欠陥となる。ボルディガにとっては「より発展した中央ヨーロッパと西ヨーロッパの諸国……では歴史の機構は、すべてマルクス主義の確認に従って作用する」のであって、文明が遅れてまだ原始的なロシアにおけるように、「歴史的情勢によって生み出されるに至らない革命的態度を…大衆に」とらせるような「意志の強度の努力」、「主意主義的で劇的」な戦術は無益なのである⁽³⁹⁾。したがってボルディガにとって「党は、革命的大衆の自然発生的運動と、中央部の組織的および指導的意志とが集中する弁証的過程の結果としては考えられず、ひとりてに発展する砂上の楼閣として、情勢が良好で革命の波頭が最高に達すれば、または党中央部が攻勢を開始し、大衆をはげましこれを行動させようとして大衆のところに下りてゆかなければならないとみなすようになれば、大衆が近づいてくるものとして考えられている⁽⁴⁰⁾」のであって、それまではひたすら党の純粹を保持することに心血をそそぐべきなのである。ボルディガのこうした体質は、人民突撃隊と労働連合にたいして共産党がとった態度に明確にあらわれる。人民突撃隊は当初未来派、無政府派などさまざまな要素からなる組織であったが、共和党革命派、無政府主義者、共産主義者などがくわわって、ファシズムの暴力に対抗するため再結集がすすみ、アナーキストの A・セコンダーリ (Secondari) と未来派的傾向をもつ B・ウンベルト (Umberto) の提唱により1921年6月27日新人民突撃隊協会が結成された。そのマニフェストはつぎのようにいっている。

「勤労者諸君!

反動的、保守的運動の委託者であり、保護者であるブルジョアジーにたいし、無益にもわが国および国際金権政治を支持し、自己をまもるため愚かにも武装集団に親近感をもつほどに狂っているブルジョアジーにたいし、かかる搾取者、資本主義ブルジョアジーにたいし、今こそ全勤労者がその腕かいたと意志をむけるべきである。⁽⁴¹⁾」

そして人民突撃隊は組織的にも一定の根をはりはじめる。たとえば7月6日のローマの植物園での集会には、セコンダーリを司令官として100人ずつの隊列に編成された2,000人が参加をしている⁽⁴²⁾。グラムシが編集にあたっているオルデ

イタリアの労資関係と諸政党についての覚書(1)

ィネ・ヌオーヴォはこの動きを重視し、セコンダリーとのインタビューを一面に掲載する。それはファシストとの闘いをさらに鮮明に表明している。

「イタリアのプロレタリアートとその組織にたいしてファシストがおこなっている体系的な戦争にたいし、もし突撃隊が介入しなければ、突撃隊は自らを否認することになるだろう。…勤労者に自由をあたえ、国内の平和を実現することを真に望んでいるわれわれは、ファシストと革命家とのあいだの争いの外部にいることもまたできる。しかし今日はもはや赤色暴力について語るばあいではない。……われわれはファシストと、また肉体労働者と精神労働者の解放を妨げるいかなる者とも闘うであろう。⁽⁴³⁾」

だが党の中央はこの時点でもなお躊躇をつづけ、指示をまつようとしているにすぎない。この突撃隊に社会党の下院議員G・ミングリーノ、ピサ県カーメラ・デル・ラヴォーロの書記、共和党员バルダッツィらがくわわることにより、この運動の政治的性格がさらに鮮明化し、また全州に設立されたことにより、この運動の統一的・人民的性格がつよまってきた。⁽⁴⁴⁾しかし8月7日党の執行委員会はこの組織に加盟すべきでもない、接触をもつべきでもないとの指示をだしたのである。それはまさに「党は他と融合しえない」というローマテーゼの戦術よしみちびかれたものであった。

労働連合結成のイニシアティブは1922年初頭鉄道組合がとったものである。鉄道組合はアナルコーサンディカリスト系の組合であるが、2月20日には新しい組織が結成され、CGL, USI (Unione Sindacale Italiana, イタリア労働組合連合、革命的サンディカリスト系)、鉄道組合、港湾組合等は、連合した反動の勢力に反対するためプロレタリアの連合に結集するようすべての政治・労働組合勢力にうったえるアピールを發表した。この動きが当初からファシズムへの決然たる闘いの意志にささえられていたと考えることはできず。むしろいぜんとしてさまざまな傾向が相争う場であったのだが、しかしこうした動きを可能なかぎりファシズムとの断固たる闘いへむけていくことが必要なことであった。労働連合の結成には共産党も招待されたのだが、この党は書簡をおくったにとどまり、このような動きとエネルギーに方向づけをあたえようとする関心を示さなかったのである。こうして労働連合においては改良派がヘゲモニーをとってしまい、8月の合法ス

トライキの失敗へとつらなる。

コミンテルンはこのような政治指導に懸念をもち、すでに1921年の秋キアリーニ（Chiarini）をとおしてグラムシに党の指導部にはいるよう求め、この時点でグラムシはこれをことわったことを「スコッチマルロとトリアッティあて書簡」でのべているが、その理由としてグラムシは同書簡のなかで、「このような性質の陰謀に手をかしたくないこと、別の指導部を欲するなら政治問題を提起すればよい」⁽⁴⁵⁾ のだということのをべている。つまりグラムシにとって党の指導部を替えるにはたんなる組織手段によるのではなく、「党を方向づける事前の活動」⁽⁴⁶⁾ が不可欠なのであって、この党内闘争についての考えは、後のグラムシによる党の方向の転換のさいに具体的な形をとる。グラムシがボルディガとの立場の相違を明確にするのは1922年末のコミンテルン第Ⅳ回大会においてであるが、この年の5月からグラムシはコミンテルン執行委員会のイタリア代表としてモスクワに滞在しており、コミンテルンの戦略を直接に知り、コミンテルンの立場から重大化するイタリアの情勢を眺めていたこともボルディガとの訣別をすすめたといえよう。⁽⁴⁷⁾

1923年春、コミンテルン拡大執行委員会は、3月から辞任を申しでていたボルディガらの執行部を解任してトリアッティ、スコッチマルロ、フォルティキアリー、タスカ、ヴォータから成る新しい執行部を任命したが、もとよりこのことによってイタリア国内でのボルディガの声望がおちたわけではなく、いぜんとして高い権威をもっていたし、また、任命された執行部は「〈混合〉または連合執行委員会」とよばれるように⁽⁴⁸⁾、前3者は多数派、後2者が従来少数派であって、新執行委員会の設立によって、イタリア共産党の方向が転換したとみなすこともできないのである。

1923年春、ボルディガがコミンテルンとの対立と、戦術について全党討論を開くことを呼びかけた「公開状」を発表し、年末までに若干の党指導者たちの署名をえたが、グラムシはこれを拒否し、ボルディガとの決定的分離にすすむように決意するものの、旧オルディネ・ヌオーヴォ・グループのトリアッティ、テルラ

チーニ、またスコッチマルロらがただちにこれに同意したわけではない。この点についてグラムシはつぎのように不安と不満をもらしている。

「タスカは1920年1月までとってきて、最後には私と彼の間の論争になったあの立場をぎりぎり押しつめた少数派にぞくしている。トリアッティは、多少はいつもの癖で決心がつかかねている。アマデーオの『力強い』人柄が彼を強く引きつけ、中途はんばな優柔不断な状態に押しとどめていて、全く法律家的な言いのがれで合理化をはかっている。ウンベルトは、アマデーオからその考えを吸収しているので自分らは彼よりも根本的にもっと極端主義者だと信じているが、知力と実践的感覚と組織能力をそなえていない。⁽⁴⁹⁾」

しかしボルディガとの訣別を決意し、コミンテルンの指示による指導部のとりかえでなく、党の多数のかくとくによる転換をめざしたグラムシは1923年12月ウィーンにうつりここから活発な書簡活動を展開する。不退転の決意をこめたこの時期のグラムシの活動は、トリアッティの“La formazione del gruppo dirigente del PCI nel 1923-24”に収録されている書簡にみごとに示されている。この書簡活動のなかでグラムシはイタリアの現実を直視することに最大の力点をおいた。つまりグラムシはイタリアの現実には、ファシズム対プロレタリア独裁という図式による一挙的解決をみるのではなく、具体的な力関係によるさまざまな現実的可能性をみようとした。それはファシズムにたいする工業ブルジョアのかくれた反対の存在、ファシズムとの闘いにおいても、またファシズムが倒れた後も自由主義的ブルジョアジーがまだ発言権をもつ可能性、労働者階級の大多数が改良主義者の影響下についている可能性、社会民主主義政府の可能性等である⁽⁵⁰⁾。このような可能性を直視することによってグラムシはさらに、ファシズムの打倒とプロレタリア独裁のあいだに中間段階を想定することが現実であるという判断にすすむ。

「情勢が積極的に革命であることに疑いはなく、したがってある時期の間にわが党が大多数を味方につけられるであろう。だがこの時期がひよとして年代的に長くはないにしても、それには疑いもなく補充的諸局面がぎっしりつまっており、われわれはある程度正確にこれを予測し、機動をおこない、プロレタリアートの経験を長びかすような誤りにおちいらないようにしなければならない。⁽⁵¹⁾」

こうしたグラムシの活動により「だれも本当のところ、ボルディガ路線にあった

わけではない⁽⁵²⁾」旧オディネ・ヌオーヴォ・グループはふたたびグラムシのもとに結集することになるのである。

1924年5月の総選挙で国会議員に当選して帰国することになったグラムシは書簡をとおしての指導から、さらに確実に党の指導の中心に位置することになるが、しかし下部におけるボルディガの声望はなお高い。1924年5月コモ湖畔でひらかれた非合法集会(=拡大中央委員会)での支持勢力は表にみられるようにグラムシのグループの8にたいしてボルディガ派は41をえている。グラムシのグループの8はタスカラのグループの10よりも小さいのである。ただし中央委員だけをとれば、グラムシらのグループ4(プラス欠席者の3名)、ボルディガ派1、タスカラのグループ4、とグラムシの努力が明白にあらわれている。執行委員会、中央委員会は、コモ集会後コミンテルンにより上から決定され、ボルディガ派をのぞいてグラムシ、タスカ、第Ⅲインター派のみで構成されることになった。この点について、マヌイルスキーはコミンテルンでつぎのように報告している。

「イタリア共産党の指導機関の構成に関する委員会の提案は、党の内部生活に重大な干渉を開くものであるが、イタリア共産党の全分派がこの問題の解決を要求しているのだから、これは行なわなければならなかった。委員会は中央委員会に属する左派の4同志の辞任を、決定しなければならなかった。われわれの規約、および世界大会の決定によれば、かかる辞任はまったく不可能である。だが、左派の同志は大会の決定を履行するうえに、規律を守って協力すると断言したから、委員会は規約上の規則の厳重な適用を免除することを考えて、辞任を認めた。あるいはむしろ、左派は1人も中央委員会の名簿に含めなかった。中央委員会は本委員会の提案に基づき、中間派9人、いわゆる右派4人、および第3インターナショナル派4人で構成される。これは決して理想的な解決ではないが、しかし左派の態度にもかかわらず、採択しなければならなかったのである⁽⁵³⁾」

コモ集会後もグラムシの活動はめざましく、1926年1月の第Ⅲ回リヨン大会では90.8%の支持をえて、書記長に選出されるにいたった。リヨン・テーゼはすでにのべたウィーンからの書簡のなかで追求してきた路線の延長戦上にある。したがってそれはイタリア社会構造の分析にとりくんでいることを顕著な特徴とし、左翼極端主義をきびしく批判してプロレタリアートの同盟、統一戦線戦術を導入し、さらにファシズムの倒壊とプロレタリア独裁の樹立を直結させずに、両者のあい

イタリアの労資関係と諸政党についての覚書(1)

だに中間的解決の問題を提起しているのである。中間的解決は労働者と農民の政府、つまり労働者農民委員会に基づく共和議会、工業の労働者統制、土地を農民へ、といった問題をふくむものである。トリアッティは後にこのリヨンテーゼについてつぎのような評価をあたえている。

「イタリア労働者階級の党はここにはじめて、一般的原則的な主張や支配階級および政府との直接の論戦にとどまるのではなくて、厳密な歴史的・科学的分析をもって冷静に、国の社会構造と労働運動の発展の諸問題ととりくみ、イタリアの資本主義制度、この制度の有機的弱点、これらの弱点の政治的諸諸果、イタリア・ブルジョアジーの反動政策全体について、明確な分析をおこなうのである。この枠組のなかにファシズムを位置づけ、……さらにそこからすすんで、客観情勢そのものによって社会の社会主義的改造の方におしやられる階級的政治的諸勢力はどのようなものかを、労働者階級がその資本主義にたいする闘争のなかでみいだす同盟者はどのようなものかを、同様な厳密さをもって分析するのである。この文書にはまだ旧来のセクト方向の痕跡がのこっている。しかし、その基本的立場が、のちに民主主義的政治思想の通貨となるべきものであったこと、現になおその通貨であることは、まぎれもない事実である。⁽⁵⁴⁾」

こうしてグラムシは上からの規律による党の転換ではなく、党の多数が政治方向を確定することによる転換を達成した。しかし同年11月8日、グラムはファシスト政府に逮捕され、イタリア共産党の政治指導の最高責任者としての活動はここで断ちきられることになる。

IV

リヨン大会後グラムシをふくめた多数の共産党員が逮捕され、その結果同大会で選出された執行部のうち逮捕を免れた者はカミッラ・ラヴェーラ、グリエーコ、トリアッティ、ラヴァッツォーリの4人だけとなる。書記長のグラムシに代って指導部の中心にたったのは、1926年3月からコミンテルンに派遣されていたトリアッティであるが、その声望と権威はまだ十全なものではなく、「同輩中の第1人者としての・書記局作業の責任者⁽⁵⁵⁾」というのがその資格であった。この指導部のあいだには当然フリクションがあったものの、「本質的に政治的同質グル

ープ⁽⁵⁶⁾」として機能してきた。

しかしコミンテルン第Ⅵ回大会後党の指導部に対立が生じ、それはいちじるしく尖鋭化し、ついに組織処分までいたる。イタリア共産党の党内論争はこのときまで比較的自由におこなわれてきたのだが、コミンテルンⅥ回大会以降組織処分が連続しておこなわれる。トリアッティ・グループ対トレッソ、ラヴァッツォーリ、レオネッティの対立・処分について「小史」はつぎのように述べている。

「党の指導機関で、これまでも党の政策とコミンテルンの指示に不同意であることを注意ぶかくかくしてきた人々のあいだに、またも日和見主義の出現がみとめられた。政治局員のトレッソ、ラヴァッツォーリ、レオネッティ…は、…以前はコミンテルンの指示に賛成していた。だが、いまや、これを実行にうつし、イタリア国内の活動を大いに強化しなければならぬことになる」と彼らは、党はまたまた数千人を監獄におくりこむつもりであり、これではこれまでの経験からなにつまなばなかつたことになる、といて党を非難した。/この3人の政治局員の日和見主義は、それがあつた程度イタリアの困難な情勢を反映してただけに、それだけいっそうゆゆしく、また危険だったのである。⁽⁵⁷⁾」

事実の経過にかんするかぎりこの説明は正しいが、ただし複雑な経過を他の面からも考察することが必要である。さいきんの研究では一般にイタリア共産党内のこの対立はソ連共産党内の対立に由来しているとみなされている。⁽⁵⁸⁾

レーニンの病臥・死去にともなう後継をめぐるソ連共産党内の論争が公然とあらわれてきたのはすでに1923年末からのことである。スターリン、ジノヴィエフ、カーメネフ、ブハーリンらはまずトロツキーに攻撃を集中して1925年1月これを軍事人民委員の地位から解任、つぎに同年12月スターリン、ブハーリン連合はジノヴィエフとカーメネフを攻撃して後者から人民委員会会議の副議長の地位をうばい、26年7月にはジノヴィエフを党政治局から排除、ひきつづきこの三者を政治局員、同候補、コミンテルン議長から追い、トロツキーについては27年10月および11月に中央委員会から、さらに党から排除することになる。こうして相連合してトロツキー、ジノヴィエフ、カーメネフらを追放したスターリンとブハーリンは、一転してたがいの抗争にはいる。このころスターリンとその支持者たちは工業化を強行し、富農への攻勢をつよめる政策を決定していたが、ブハーリン

イタリアの労資関係と諸政党についての覚書(1)

らはこれに反対であった。スターリンらは「その反右派」闘争を、国際面における労働者運動右派＝社会民主主義への攻撃を再浮上させることによって補強することになるのである。1928年2月のソ連共産党機関紙は、大衆がますます左へ移動しつつあり、社会民主主義指導者が右へ移動しつつあるので、コミンテルンは国際社会民主主義者にたいする闘争を強化するようにうったえ、同年7月から9月にかけて開催されたコミンテルン第Ⅶ回大会は1921年の第Ⅲ回大会はいらいの統一戦線戦術を「階級対階級」の政策にとって代えた。同Ⅶ回大会では報告者として脚光をあびたブハーリンも、1年後の1929年7月のコミンテルン第10回拡大執行委員会総会で、タスカらとともに同執行委員会幹部から除名され、ソ連国内の立場においてもプラウダ編集長、共産党政治局員を解任されることになる。そしてコミンテルン同総会でこの反右派闘争は、第Ⅱインタナショナル諸党が全般的にファシスト化しており、社会ファシズムはファシズムよりも危険であるという定式に発展した。

コミンテルン第Ⅶ回大会⁽⁵⁹⁾における路線の転換があったのちも、イタリア共産党の指導部は、ファシズムの崩壊と社会主義革命のあいだには共和議会という中間段階があること、大衆が急進化しているという判断をとらずにファシスト組合へ滲透するようにつとめる、との方向を保持し、1928年10月の中央委員会ではトリアッティ、グリエーコ、シローネらは楽観的なみとおしをいましめ、ファシスト組合のなかで達成しなければならない任務はなお長期間を要するという立場をとっていた。

ところでグラムシら逮捕後の「本質的に政治的同質グループ」としての指導部のあいだのフリクションは、ロンゴらによる左からの批判であった。ロンゴらは、大衆が急進化しつつあること、アヴェンティエーノは終り、もはや民主的局面を考えることはできない、共和議会の定式は反ファシズム闘争で有効な役割をはたさない、労働者・農民政府はプロレタリア独裁と同義語であることなどを一貫して主張してきた。このロンゴらの批判は、コミンテルン第Ⅲ回大会の統一戦線戦術、グラムシ、トリアッティらの鍊りあげたりヨン・テーゼと対立するものであり、

したがって逆にコミンテルン第Ⅶ回大会の方向と合致するものであった。ロンゴらはその批判的立場を一貫して変えなかったものの、トリアッティの政治局運営もロンゴが候補メンバーとして討論、選抜へ十分参加しうるように配慮していたので、フラクシオン活動へ走ろうとはしなかった⁽⁶⁰⁾といわれるが、しかしコミンテルンの方針転換がロンゴらの立場をつよめたこともまちがいない。

いまのべたように1928年7月～9月のコミンテルンⅦ回大会後リヨン・テーゼの方向を変えなかったトリアッティらにたいして、またタスカの除名を実行しないことにたいして、1929年7月のコミンテルン第10回拡大執行委員会総会ではイタリア共産党の指導者に各国の党からの批判が集中した。トリアッティがリヨン・テーゼの立場を固執したらその政治的立場がいちじるしく困難になったであろうことは容易に推測できる。その批判と圧力のなかでトリアッティは立場を修正する。リヨン・テーゼの方向とは反対に、トリアッティは、中間的諸要素が消失した結果、もはや人民革命のみとおしを語るべきでなく、プロレタリア革命が合言葉であるとの発言をおこなったのである。そして同年9月のイタリア共産党中央委員会では、⁽⁶¹⁾27年以來の指導の連続性を強調しつつも、全般的情勢が変化したために修正が必要であることをみとめ、ロンゴらが主張していた諸点をうけいれ、そして同年のスタート・オペライオに共和議会のスローガンを放棄する論文をかいた⁽⁶²⁾。こうしてトリアッティは基本的にロンゴの立場をうけいれたのである。

この中央委員会はまたタスカの除名を決定した。タスカの処分もふくめて、見解の相違にたいする組織処分に慎重であったこの党としてはこの後も必ずしも多くはないが、この時期集中してあらわれた処分のひとつであった。

このようなトリアッティの立場の移動にたいして、レオネッティらが「ひとつの極から他の局への移行であり『より悪い日和見主義』とはげしく非難したのである。⁽⁶³⁾

ところで、中間的諸局面を経過するであろうことを否認してプロレタリア独裁の樹立を直接の課題とし、しかも大衆が急進化しているとの認識からは、不可避

的にイタリア国内での活動をつめよるという方針が接続する。この点をめぐってもロンゴ、そしていまやロンゴの路線をうけいれたトリアッティらと、トレッソ、ラヴァッツォーリ、レオネッティらとの対立がさらにはげしくなり、そしてこれに「トリアッティの指導にたいする増大する不安が混りあった⁽⁶⁴⁾」のである。

1929年末、ロンゴはイタリア国内での闘いを強化する計画を作成した。

「党のすべての機関（州委員会、作業部局、政治局）は、活動の面だけでなく（このことは従来もおこなわれてきた）、それぞれの本拠の面でも決定的にイタリアへ帰っていく方向をとることが必要である。すべての機関が外国に本拠をもち、重要な会合、会議、政治局の下部の同志との接触が外国でおこなわれたという1928～29年の状況は、例外的な状況であって、これを終了させねばならないと考えるべきである。このことは一般的な方向として理解するだけでなく、今後数週間以内に必要なあらゆる慎重さをもって実現すべき任務としても理解しなければならない。政治情勢が予測されるように発展するときに、これらの目標の実現がおくれれば、われわれは安全と組織化の点で破滅的な条件のなかで、これをあわてて実現しなければならないことになるだろう。」⁽⁶⁵⁾

レオネッティは「一共产主義者」という書物のなかで、こうした全般的な転換にたいする彼らの立場を3点にまとめ、要旨つぎのように説明している。

1. イタリアの情勢の評価：経済危機が深化し、テロルが強制した均衡を破壊しようとする大衆の傾向がつよまっていることは否定しないが、まったく近い将来、鋭い革命的情勢にすすむという多数派の確信を拒否し、これにたいして闘かった。
2. 過渡期：イタリアのような国ではブルジョア民主主義型人民革命の定式ではなく、プロレタリア社会主義革命、労働者階級による権力の獲得が問題である。しかしファシズムから労働者による権力の掌握への過渡期がどのように生ずるかはそれとは別の問題である。前方への一撃によって権力掌握に到達することもありうるが、プロレタリアートの前衛の、プロレタリアートの政党、つまり共産党の革命的能力によって長短のきまる民主主義的プレリュードがあるというみとおしのほうがはるかにありえそうである。
3. イタリアにおける組織活動の方法：まちがった政治的みとおしからは、あやまった組織的な結論がひきだされる。われわれが提案していたのは、イタリアにおける活動を放棄するということはまったく別の問題である。そうではなくて、過去のきびしい教訓を考慮にいれて、現実の情勢に適合した活動方法をもって党を組織化すること、党の勢力、とくに何年にもわたる革命家の経験をもち、代替不可能な果実である党の幹部を消耗しない活動方法を追求することであった⁽⁶⁶⁾。

イタリアの労資関係と諸政党についての覚書(1)

イタリアにおける組織活動の方法をのぞけば、レオネッティらがむしろリオン・テーゼの継続者だったといえよう。しかし1930年1～2月に、トリアッティ、カミッラ・ラヴェーラ、ロンゴ、セッキア、グリエーコ対トレッソ、レオネッティ、ラヴァッツォーリ、シローネの対立はますますはげしくなり、ついに組織処分に到達するのである。同年3月20日の中央委員会では、シローネとラヴァッツォーリを政治局と中央委から排除、レオネッティを政治局から排除、中央委候補に格下げ、同時にボルディガの党からの除名が決定、さらに同年6月トレッソ、レオネッティ、ラヴァッツォーリは党からも除名され、その後しばらくしてシローネの除名もおこなわれたのである。

- (1) *Il Partito Socialista Italiano nei suoi Congressi volume III* pp. 41,80, Edizioni Avanti! Milano, 1963.
- (2) *Ibid*, p. 75.
- (3) A. グラムシ、「イタリア状況とイタリア共産党の任務——リオン大会テーゼ(1926年1月)——」石堂清倫編グラムシ問題別選集, 4, p. 228. 現代の理論社, 1972年
- (4) P. Spriano, “Storia del Partito comunista italiano I”, p. 29, Einaudi, Torino 1967.
- (5) レーニン「イタリア, フランス, ドイツの共産主義者へのあいさつ」レーニン全集 30, pp.40-41, 大月書店。
- (6) 「イタリア社会党ボローニャ大会に対する共産主義インターナショナル執行委員会の書簡」, 1919.9.22, ジェーン・デグラス編者「コミンテルン・ドキュメントI」所収, p.68, 荒畑寒村, 大倉旭, 救仁郷 繁訳, 現代思潮社, 1977年。
- (7) レーニン, 「共産主義内の『左翼主義』小児病」1920.5.12, レーニン全集 31, pp. 100～101, 大月書店, 1970年。
- (8) 「コミンテルン第二回大会で承認された共産主義インターナショナルへの加入条件」1920.8.6, J. デグラス, 「コミンテルン・ドキュメントI」所収 pp.148,150.
- (9) 「あらゆる目撃者は、——イタリア代議員も含めて——イタリアにおける情勢は完全に革命的だということを断言もしくり返しもしている。にもかかわらず、多くの場合、党はそれに合言葉を与え、もっと系統的で組織的な性格を与え、それをブルジョア国家に対する決定的攻勢に転ずることによって、その全運動を一般化しようとはしないで、傍観している。…

こうしたことの根本原因は、党が改良主義的自由主義ブルジョア分子によって毒されているからであって、彼らは1度内乱が起こるや公然たる反革命の手先、プロレタ

イタリアの労資関係と諸政党についての覚書(1)

- リアートの階級敵となる。これら分子の主観的正直や謙遜とその客観的に危険な役割とを混同することは素朴であり馬鹿げている。……彼らは個人的には正直かもしれない、だが客観的には革命の敵であり、共産主義プロレタリアートの党にあっては彼らを容れる余地はない。」(「イタリア社会党に対する共産主義インターナショナル執行委員書の書簡」1920.8.27, J. デグラス編著コミンテルン・ドキュメント I p.164.)
- (10) L. Cortesi “Le Origini del PCI” p. 168, Laterza, Roma—Bari, 1973.
- ただし、改良派からの分裂については一貫していたのであって、「ホルディガは1919年以來改良派からの分裂への傾向の代表者であり、個人的な立場の影響力のレベではすでに1917年以來そうであった。」F. Livorsi, “Amadeo Bordiga”, p. 156, Riuniti, Roma, 1976.
- (11) Il Soviet は1918年12月22日に第1号がでている。当初は、「ナポリ県 イタリア社会党各支部機関誌となっていたが、1919年4月20号から「カンパーニャ州イタリア社会党機関誌」となり、1919年10月20日号からは「イタリア社会党共産主義棄権派フラクシオン機関誌」、さらに1921年2月6日号からは「コミンテルン支部イタリア共産党機関誌」と副称を変えて1922年4月29日号までつづいた。
- (12) (4)におなじ p. 74.
- (13) B. ラジッチ/M. M. ドラチコヴィチ「コミンテルンの歴史」、菊地昌典 監訳、p. 239, 三一書房 1977.
- (14) (13)におなじ p. 239.
- (15) G. フィオー「リグラムシの生涯」藤沢道郎訳 pp. 217, 218, 平凡社, 1972.
- (16) 藤沢道郎「イタリア・マルクス主義研究」p.48, 現代の理論社, 1976,
- なお Bertti は、グラムシの参戦主義が、リヴォルノで重要な地位につけさせなかった理由だとしている。また Bertti は、グラムシをツィンメルヴァルトやキーンタールでレーニンに接触させなかったのも同様の理由であるし、これにたいして、リヴォルノで発言した者(ボンパッチ, ジェンナーリ, ミジアーノ, テルラチーニら)はいずれも戦争反対の立場を明確につらぬいた、とものべている。R. Alcara, “La formazione e i primi anni del Partito Comunista Italiano nella storiografia marxista”, p. 93, Jaca Book, Milano, 1970.
- (17) P. トリアッティ「イタリア共産党」トリアッティ選集 3, pp.235-236 合同出版 1968.
- (18) コミンテルン史およびヨーロッパ共産主義運動史の研究者 B. ラジッチと M.M. ドラチコヴィチは「イタリア社会党を解体し、共産党を形成しようというレーニンの決意が、おそらくは第二回大会における交渉と討論の所産であった」。し、また「セルラーティ放逐のイニシアティブをとったのはジノーヴィエフではなかったし、規約上そ

イタリアの労資関係と諸政党についての覚書(1)

のような決定をくだす権限を与えられているはずの執行委員会でもなかった。それはレーニンによるものだったのである」としている。文献(13) p.239,347.

イタリアの研究者では、Berti が「第Ⅲインターの直接の介入をリヴォルノの分裂の決定的要因としている」(R. Alcara, “La formazione e i primi anni del partito comunista Italiano nella storiografia marxista” p. 95, Jaca Book, Milano, 1970)のにたいして、Spriano はリヴォルノの分裂はボルディガ派の吸引のための策戦が功を奏し、あまりにも左よりでおこなわれたとみなし、その原因を基本的にはボルディガの策戦に帰している (Ibid., p. 106)。

(19) レーニン「イタリア社会党の党内闘争について」1920. 11.4, レーニン全集31, p. 385.

(20) ラジッチらは「…事実はやがて、レーニンの戦術こそ誤りであったことを、まさに三重の意味において示すことになった」と要旨つぎのように判断している。

第1にレーニンは新しく結成されたイタリア共産党の真の力量について誤った見方をしていた。コミンテルンの指導者たちの楽観主義にたいして、イタリア共産党の現場ちかくにおくられていた者はより客観的な冷厳なみかたをしている。

第2にレーニンは政治的かつ心理的側面において誤りを犯していた。それは、セルラーティがコミンテルンにとどまることを望んで示した数々の忠誠を明かす抗議とくりかえされた忍耐張さを、偽善としてしりぞけたことである。

第3は、イタリア全体に関する、また国際労働運動全般に関するものであった。イタリアにおけるプロレタリア革命の前進によって共産党の創立とセルラーティとの絶縁が緊急に要請されているとしたレーニンの主張は、現実の事態によって反駁された。……ポリシェヴィキは差し迫った死闘が共産主義プロレタリア革命と資本主義社会(資本主義の忠実な追従者と考えられた社会民主主義をも含む)とのあいだに起こりつつあると信じた。だが実際に形をとりつつあったのは、議会民主主義、つまり共産主義を含むあらゆる政党の存在を保証する(そして、ときには社会民主主義者の積極的支持をも必要とする)ものと、ファシスト独裁、つまりあいだに立つ社会民主党を蹴落し共産党をはじめとして自由派、カトリック派に至るまで一切の政党を破壊しようとするものとのあいだの戦闘だったのである。……リヴォルノの分裂はイタリア労働運動を弱体化させ、国内の民主勢力(カトリック、自由派、改良主義的社会主義者)のあいだに協力関係をつくってムッソリーニの勝利を挫くことを不可能にしまった。文献(13) p.p. 347~349

第1の点について、「ジノヴィエフは、コミンテルンの執行委員会に、ボンバッチ、ボルディガ、テルラチーニに指導された共産主義者は〈党の75~90%を獲得する〉と判断している、と伝えている。」Lepre—Levrero, “La formazione del partito

イタリアの労資関係と諸政党についての覚書(1)

comunista d'Italia" p. 350, Riuniti, Roma, 1974.

(21) 文献16 p. 51

(22) 文献(15)より再引用。p. 221

L. ロンゴもまた1956年6月20日の Unità に「リヴォルノの分裂はあまりにも左よりで生じたことが明らかにされた。このことが避けられたかどうかを討論することができるし、また討論された。いずれにせよ、われわれは批判的的判断を共有している」と書いた。Pier Antonio Graziani, "Il PCI ieri e oggi", p. 14, Cinque Lune, Roma, 1977, より再引用

(23) (7) におなじ pp. 101-104. そしてボルディガはコミンテルン第Ⅱ回大会後、形の上では棄権主義を放棄している。「1920年のモスクワ大会後、改良派の除名と、イタリア社会党のイタリア共産党の転形……に賛成する共産主義的諸成員が1920年10月1日ミラノに会合した。ボルディガはこの機会に、公けに棄権主義を放棄した。」F. Livorsi, "Amadeo Bordiga", p. 157, Riuniti, Roma —Bari, 1976.

しかし、本質的にはボルディガは棄権主義を放棄したとみなすわけにはいかない。後に彼は選挙の候補者になることを拒否している。

(24) レーニン「共産主義インタナショナル第二回大会の基本的任務についてのテーゼ」1920.7.4, レーニン全集 31, p.191.

(25) (15)におなじ p. 222.

(26) レーニン「わが国の内外情勢と党の任務」1920. 11. 21, レーニン全集 31, p.413.

(27) 「コミンテルン第三回大会で採択された世界情勢とコミンテルンの任務とに関するテーゼ」1921.7.4, 文献(6)所収, pp.208-209.

(28) レーニン「共産主義インタナショナルの戦術を擁護する演説」1921.7.1, レーニン全集 32, pp.498-509.

(29) 文献(4) p.159.

(30) Ibid., p. 159.

(31) J. デグラス編著「コミンテルン・ドキュメント」Ⅰ p.275.

(32) 文献(4) pp.179~180

(33) 文献(31) p.329.

(34) 文献(4) p.188.

(35) 文献(4) p.189

(36) 文献(1) p.239.

(37) ジェーン・デグラス編著「コミンテルン・ドキュメント」Ⅱ p.53.

(38) A. グラムシ「スコッチマルロとトリアッティあて」書簡, 1924. 3. 1, 「トリアッティあて」書簡 1924.3.27, 「アルフォンソ・レオネッティあて」書簡 1924. 1. 28,

イタリアの労資関係と諸政党についての覚書(1)

石堂清倫編 グラムシ問題別選集 3, p. 250, 262, 223.

- (39) .A. グラムシ「トリアッティ, テララーニその他あて」書簡 1924. 2. 9, Ibid., pp. 234-235.
- (40) (39) におなじ p.233.
- (41) 文献 (4) pp.141-142.
- (42) Ibid., p. 142.
- (43) Ibid., p. 142.
- (44) Ibid., p. 144.
- (45) A. グラムシ「スコッチマルロとトリアッティあて」書簡, 1924.3.1, 文献 (38), p. 249.
- (46) Ibid., p. 249.
- (47) Merli は, コミンテルン第Ⅳ回大会でグラムシとボルディガのあいだで明白な分離が生じたのではなく, 1923年6月の拡大執行委員会までは, ボルディガのコミンテルンに対する主張を支持している。また, グラムシのボルディガからの離別は, さいしょの時期には戦略・戦術の全体にかんしておこなわれたのではなく, 当初は社会党との合同問題をめぐっておこなわれた, としている。(R. Alcará, “La formazione e i primi anni del Partito Comunista Italiano nella storiografia marxista” p. 78, Jaca Book, Milano, 1970.
- (48) 文献 (4) p.283,
また, De Clementi もつぎのようにいっている。「トリアッティとテララーニを中心とした」新しい「指導グループはこの年の末(1923年末——引用者)までボルディガに忠実なままにとどまっていた, というよりむしろ, インタナショナルにたいしてボルディガを支持する意図をもっていた。」A. De Clementi, “Amadeo Bordiga”, p. 180, Einaudi, Torino, 1971.
- (49) A. グラムシ「アルフォンソ・レオネッティあて」書簡 1924. 1. 28, 文献 (38) p. 223.
- (50) A. グラムシ「トリアッティ, テララーニその他あて」書簡 1924. 2. 9, 文献(38) pp. 237-238.
- (51) (50) の書簡におなじ, p. 238.
- (52) 文献 (4) p. 302.
- (53) 文献 (37) p. 103.
- (54) 文献 (17) pp. 258-259.
- (55) P. Spriano “Storia del partito comunista italiano II” p. 183, スプリアーノは, トリアッティが1928.3.19にイタリア共産党政治局にあてた書簡にその根拠を求めて

イタリアの労資関係と諸成党についての覚書(1)

いる。

- (56) Ibid., p183
- (57) イタリア共産党編「イタリア共産党小史」, 1950, 長南芳樹訳, 国民文庫, p. 74, なお, マルチェッラ・フェルラーラ, マウリツィオ・フェルラーラ「トリアッティとの対話」(下・pp.25-26, 合同出版, 1961), トリアッティ, 「イタリア共産党史」1958, (選集 3, p.268, 合同出版 1968), 山崎 功「パルミーロ, トリアッティ」(p. 120, 合同出版 1965), 山崎 功「イタリア労働運動史」(pp 331~332 青木書店 1970)は, 表現上の差異はあっても, この対立を基本的に同一の観点から扱っている。
- (58) たとえば, A. Tasca はつぎのようにいっている。「実際, 1928年末から共産党指導者の思考のなかには, 真の・かつ・固有の政治的退行があった。この退行の本質的要素は, もっぱら外交政策の利害により決定されるモスクワの指導への彼らの全面的従属である。」, A. Tasca, “primi dieci anni del PCI”, pp. 167-168, Laterza, Bari, 1971.
- G. Galli の “Storia del partito comunista italiano” も「ロシアでの出来事が党の生活に決定的な影響をおよぼした」としている。p. 140, Il Formichiere, Milano, 1976.
- (59) コミンテルン第Ⅵ回大会におけるトリアッティの発言も, プハリーンの報告に賛意を表しつつも, リオンテーゼを基礎としている。選集 1, 「コミンテルン第六回大会での発言」 pp.114~139.
- (60) 文献 (55) p. 184
- (61) E. Ragionieri は, イタリア共産党の《転換》が1930年に実現したとし, 1929年7月のコミンテルン第Ⅹ回拡大執行委員会でも社会ファシズム, 日和見主義との闘い, 状況判断についてクーシネンらと相違しているとしている。E. Ragionieri, “Palmiro Togliatti”, pp.92~93 Riuniti, 1973. また, P. Secchia も「トリアッティの転換は1930年の1月8日におこなわれた」としている。G. Bocca, “Palmiro Togliatti”, p.201, Laterza, Roma—Bari, 1973.
- (62) トリアッティ「あるスローガンについて」1929. 選集 1. pp 140~152
- (63) 「トリアッティはふたつの砲火, つまり, “若者たち” 左派からの批判と, レオネッティ, トレッツ, ラヴァッツオーリらの構成するグループの効率的批判のあいだにたたされた」G. Bocca, “Palmiro Togliatti”, p. 199, Laterza, Bari—Roma, 1973.
- (64) 文献 (55) p. 221.
- (65) Ibid., p. 239.
- (66) A. Leonetti “Un comunista 1895/1930” pp. 173-174, Feltrinelli, Milano, 1977.